# 尼提

芥川龍之介

舎衛城（しゃえいじょう）は人口の多い都である。が、城の面積は人口の多い割に広くはない。従ってまた厠溷（しこん）も多くはない。城中の人々はそのためにたいていはわざわざ城外へ出、大小便をすることに定（き）めている。ただ波羅門（ばらもん）や刹帝利（せっていり）だけは便器の中に用を足し、特に足を労することをしない。しかしこの便器の中の糞尿（ふんにょう）もどうにか始末（しまつ）をつけなければならぬ。その始末をつけるのが除糞人（じょふんにん）と呼ばれる人々である。

もう髪の黄ばみかけた尼提（にだい）はこう言う除糞人の一人である。舎衛城の中でも最も貧しい、同時に最も心身の清浄（しょうじょう）に縁の遠い人々の一人である。

ある日の午後、尼提はいつものように諸家（しょけ）の糞尿を大きい瓦器（がき）の中に集め、そのまた瓦器を背に負ったまま、いろいろの店の軒（のき）を並べた、狭苦しい路を歩いていた。すると向うから歩いて来たのは鉢を持った一人の沙門（しゃもん）である。尼提はこの沙門を見るが早いか、これは大変な人に出会ったと思った。沙門はちょっと見たところでは当り前の人と変りはない。が、その眉間（みけん）の白毫（びゃくごう）や青紺色（せいこんしょく）の目を知っているものには確かに祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）にいる釈迦如来（しゃかにょらい）に違いなかったからである。

釈迦如来は勿論三界六道（さんがいろくどう）の教主（きょうしゅ）、十方最勝（じっぽうさいしょう）、光明無礙（こうみょうむげ）、億々衆生平等引導（おくおくしゅじょうびょうどういんどう）の能化（のうげ）である。けれど

もその何ものたるかは尼提の知っているところではない。ただ彼の知っているのはこの舎衛国の波斯匿王（はしのくおう）さえ如来の前には臣下のように礼拝（らいはい）すると言うことだけである。あるいはまた名高い給孤独長者（きゅうこどくちょうじゃ）も祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）を造るために祇陀童子（ぎだどうじ）の園苑（えんえん）を買った時には黄金（おうごん）を地に布（し）いたと言うことだけである。尼提（にだい）はこう言う如来（にょらい）の前に糞器（ふんき）を背負（せお）った彼自身を羞（は）じ、万が一にも無礼のないように倉皇（そうこう）と他（ほか）の路（みち）へ曲ってしまった。

しかし如来はその前に尼提の姿を見つけていた。のみならず彼が他の路へ曲って行った動機をも見つけていた。その動機が思わず如来の頬（ほお）に微笑を漂（ただよ）わさせ

たのは勿論である。微笑を？――いや、必ずしも「微笑を」ではない。無智愚昧の衆生に対する、海よりも深い憐憫の情はその青紺色の目の中にも一滴の涙さえ浮べさせたのである。こう言う大慈悲心を動かした如来はたちまち平生の神通力により、この年をとった除糞人をも弟子の数に加えようと決心した。

　尼提の今度曲ったのもやはり前のように狭い路である。彼は後を振り返って如来の来ないのを確かめた上、始めてほっと一息した。如来は摩迦陀国の王子であり、如来の弟子たちもたいていは身分の高い人々である。罪業の深い彼などは妄りに咫尺することを避け

なければならぬ。しかし今は幸いにも無事に如来の目を晦(くら)ませ、——尼提ははっとして立ちどまった。如来はいつか彼の向うに威厳のある微笑(びしょう)を浮べたまま、安庠(あんしょう)とこちらへ歩いている。

尼提は糞器の重いのを厭(いと)わず、もう一度他の路へ曲って行った。如来が彼の面前へ姿を現したのは不可思議(ふかしぎ)である。が、あるいは一刻も早く祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)へ帰るためにぬけ道か何かしたのかも知れない。彼は今度も咄嗟(とっさ)の間(あいだ)に如来の金身(こんじん)に近づかずにすんだ。それだけはせめてもの仕合せである。けれども尼提はこう思った時、また如来の向うから歩いて来るのに喫驚(びっくり)

した。

三度目（みたびめ）に尼提の曲った路にも如来は悠々と歩いている。

四（よ）たび目に尼提の曲った道にも如来は獅子王（ししおう）のように歩いている。

五（いつ）たび目に尼提の曲った路にも、――尼提は狭い路を七（なな）たび曲り、七たびとも如来の歩いて来るのに出会った。殊に七たび目に曲ったのはもう逃げ道のない袋路（ふくろみち）である。如来は彼の狼狽（ろうばい）するのを見ると、路のまん中に佇（たたず）んだなり、徐（おもむ）ろに彼をさし招いた。「その指繊長（ゆびせんちょう）にして、爪は赤銅（しゃくどう）のごとく、掌（たなごころ）は蓮華（れんげ）に

似たる」手を挙げて「恐れるな」と言う意味を示したのである。が、尼提はいよいよ驚き、とうとう瓦器（がき）をとり落した。

「まことに恐れ入りますが、どうかここをお通し下さいまし。」

進退共に窮（きわ）まった尼提は糞汁（ふんじゅう）の中に跪（ひざまず）いたまま、こう如来に歎願した。しかし如来は不相変（あいかわらず）威厳のある微笑を湛（たた）えながら、静かに彼の顔を見下（みおろ）している。

「尼提（にだい）よ、お前もわたしのように出家（しゅっけ）せぬか！」

如来が雷音（らいおん）に呼びかけた時、尼提は途方（とほう）に暮れた余り、合掌（がっしょう）して如来を見上げていた。

「わたくしは賤(いや)しいものでございまする。とうていあなた様のお弟子(でし)たちなどと御一(ごいっ)しょにおることは出来ませぬ。」

「いやいや、仏法(ぶっぽう)の貴賤を分たぬのはたとえば猛火(みょうか)の大小好悪(こうお)を焼き尽してしまうのと変りはない。……」

それから、——それから如来の偈(げ)を説いたことは経文(きょうもん)に書いてある通りである。

半月(はんつき)ばかりたった後(のち)、祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)に参った給孤独長者(きゅうこどくちょうじゃ)は竹や芭蕉(ばしょう)の中の路(みち)を尼提が一人歩いて来るのに出会った。彼の姿は仏弟子(ぶつでし)になっても、余り除糞人(じょふんにん)だった時と変っていない。が、彼の頭だけはと

うに髪の毛を落している。尼提は長者の来るのを見ると、路ばたに立ちどまって合掌した。

「尼提よ。お前は仕合せものだ。一たび如来のお弟子となれば、永久に生死を躍り越えて常寂光土に遊ぶことが出来るぞ。」

尼提はこう言う長者の言葉にいよいよ慇懃に返事をした。

「長者よ。それはわたくしが悪かった訣ではございませぬ。ただどの路へ曲っても、必ずその路へお出になった如来がお悪かったのでございまする。」

しかし尼提は経文によれば、一心に聴法をつづけ

た後(のち)、ついに初果(しょか)を得たと言うことである。

（大正十四年八月十三日）

底本：「芥川龍之介全集６」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８７（昭和62）年３月24日第１刷発行
　　１９９３（平成５）年２月25日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年２月１日公開
２００４年３月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。